

＜調査する身体＞：『ポピュラー文化ミュージアム』「コラム5 街そのものがポピュラー文化ミュージアム？」補論

京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センター

伊藤遊＝イトウユウ

はじめに ＜方法の主体＞

- 本発表の目的は、SAmC が関心を持ち続けている＜ポピュラー文化＞＝＜日常生活文化＞を、＜日常生活＞から切り取り、アーカイブし、研究するのは誰なのか、という＜方法の主体＞に関する問題を考えるきっかけを提供すること。
- ここでは、^{こん・わじろう}今和次郎が提唱した考現学という方法を検証することで、今とその考現学に直接影響を与えた、柳田國男と彼の構想した郷土研究（郷土生活の研究）－民俗学という方法が内在させていた＜方法の主体＞への関心という問題にスポットを当てる。

問い：＜日常生活＞を認識し・表象する民俗学者／考現学者とは誰なのか？

⇒ ＜日常生活＞を生活している人、つまりすべての人が民俗学者・考現学者たり得るのではないか、民俗学・考現学とはそうした可能性を持った方法だったのではないか。

1 「郷土生活の研究」－民俗学における＜方法の主体＞のズレ

- 柳田の「郷土生活の研究」は、当初、「郷土」に生きる人々自身が各々の世界を意識的に認識するための方法論として提示されていた。
- しかしながら、実際の「郷土生活の研究」－民俗学は、当初の理念とはズレた＜方法の主体＞を形成していくことになる。

(1) 「部分としての事実」として“利用”される民俗誌

＜日常生活＞の実践者が自らの「日々の実践」を「書く」 → 「自己認識」・「自己表象」としての＜日常生活＞

----- ↓ -----

「自己認識」の“副産物”としての民俗誌



「民俗学者」が「読む」 → 民俗誌に記述された＜日常生活＞を、「日本」という“大概念”の「事実の部分」として“利用”

↓

＜日常生活＞の「提示」

(2) 「他者表象」としての民俗誌

フィールドワーカー「語り合う」「聞く」

「話者」対「話者」の「対話」(民俗学 cf.[人類文化研究会編 1994])

「調査者」と「被調査者」の「協同作業」(社会学 cf.[Langness, Frank 1981 = 米山・小林訳 1993])

↓

デスクワーカー「書く」

「民俗学者」による記述

↓

<日常生活>の提示

2 今と柳田の<学問—研究>指向

- 今・考現学／柳田・民俗学のズレは、二人が共に持っていた<学問—研究>指向を、それぞれの方法論がいかにか反映し得たかというその差異。

2-1 柳田の<学問—研究>指向——<方法の主体>分裂の結果的な原因として

2-2 今の<学問—研究>指向とその継承

2-1-1 考現学の“末裔”① 現代風俗研究会

- 現代風俗研究会(1977～): 桑原武夫・多田道太郎・鶴見俊輔らを発起人とする民間研究団体。当初は「なにか特定の対象についての学問体系の構築というよりは、学問そのものに向かう身ぶりや姿勢が共通の感心事」[野口 1997: 68]であったと言えるが、近年、「風俗」という「対象」こそを明らかにしていこうとする傾向が強くなっている。そのことは、今が中途半端な形で行っていた「科学的調査」(例えば、定点観測。)を、より組織的・継続的に行うことで、考現学を<学問—研究>の方法として(特に社会学の系譜として)継承できるとする[現代風俗研究会編 2000]姿勢からも言える。

2-1-2 考現学の“末裔”② 日本生活学会

- 日本生活学会(1972～。実際の活動は翌年今の逝去後。): 今和次郎を初代会長に、諸分野の研究者によって設立。今の「生活」概念——その全体性・生活改善的性格を色濃く継承。この「全体性」を反映した、かなり幅広い「広場学」を目指しているが、そこには、<学問—研究>的方向とは別のものを探っていこうというよりは、統計分析といった“理系的な”方法の取り込みの意志が見て取れる。

3 今の<学問—研究>指向とその挫折

3-1 考現学における「断片報告」の意味

- 考現学がこれまで<学問—研究>としての位置を得られていないひとつの理由は、柳田的に言えば、「報告」のほとんどが「理論」になっておらず、「断片」のままであったから。
- 疋田正博: 『モデルノロヂオ』(1930)に収録された 119 記事を、「調査報告の煮詰り方

の程度][足田 1986 : 17]で分析。調査報告のうち、ただ「風俗現象を描写したり、何らかの点に着目して記録、集計しただけの」[同 : 17]「断片」的なものの割合は、例えば吉田謙吉の場合、43 のうちの 40 であり(その他の「考現学者」の場合、44 のうち 38。)、一方今の場合は、32 のうち 12 の報告において仮説や結論が導かれていた。吉田自身、今のこうした差異には意識的(「いろいろな方面に、それぞれの確なひろがりを持つ今さんの仕事と、まだまだ享楽の分子に入り込んである私の仕事との、各々の特徴を露骨に発揮して、統計に関するすべては今さんが分担し、私は断片様々を拾う事になったのである。」[吉田 1925「一九二五年初夏東京銀座街風俗記録・断片」今・吉田 1930 = 1986 : 43])

○ 個性的な事象としての生活

⇒ 今は、「比較」に耐え得る平均化された「情報」を生み出す平均化された<方法の主体>を求める一方で、「平均化」をすり抜けるような態度で調査をし、次々と“役に立たない”断片報告を生み出していく考現学者を黙認した。そうすることで、今の中のアンビバレントは解消されなかったが、考現学は明らかに、柳田・民俗学のように学問—研究>路線とは別の何かを形成し得る可能性を得たと言える。なぜなら、そこでの「断片報告」ひとつひとつは、「部分としての事実」として「理論」に回収されるような「他者表象」というより、考現学という<方法の主体>の「自己意識」こそを反映したものと考えることができるから。

3 - 2 考現学における「主観性」

○ 今の<学問—研究>指向は、徹底した「客観性」の強調という形で主張される。そのために選んだひとつの方法は、聞き書きを捨てることだった。

- ・ 本所・深川での考現学調査：「殆ど対象者達には感知されないやうに」するため、「服装にも表情にもその地方色に同化するやうにつとめ」、「ポケットの中で、ポケットの手で大多数のノート」をとる[今「本所深川貧民窟附近風俗採集・統計考察」今・吉田 1930 = 1931 : 75-80]

- ・ 「尾行」調査

⇒ しかしながら、こうした「他者」に対する徹底した「客観性」への希求が、結果的に、調査者の「主観」のみに頼るフィールドワークを形成していたというパラドクスを生む。

4 考現学第3の“末裔”

○ ここで紹介する考現学第3の“末裔”たちは、世界というものを、その作り手の意思を空洞化した上で、「調査者」が再解釈していく。この、普通ならそれこそ趣味的だといって顧みられない第3の評価の系譜を考現学のあり得た方向としてあえて評価することで、<学問—研究>という位相を前提化している第1、第2の継承の仕方を相対化。

4 - 1 路上観察学会

4 - 1 - 1 「自分の科学」

○ 藤森照信：「世相風俗や街の諸物を記録採集してそこからなにか本質的なものを引きだそうという学術的傾向をもって」今和次郎と、「面白いもの珍しい現象を発見し記

録すること自体に喜びを覚えるオタク的傾向が強かった」吉田謙吉とを明確に区別し、前者を日本生活学会・現代風俗研究会のルーツとしたのに対し、後者を継承したのが路上観察学会であるとした[藤森 1997 : 69]。

- 赤瀬川原平：考現学に「体系化、システム化されることのない役に立たない「学問」と「芸術」の狭間にあるような」ものを見出す[赤瀬川監修 1995 : 142]。
- 「超芸術トマソン」：1982年に、赤瀬川によって提唱される（こう名付けられる「物件」の「発見」自体は、1972年）。「超芸術」というのは、「芸術」が「芸術家が芸術だと思って作るもの」であるのに対し、「超芸術家が、超芸術とは何とも知らずに無意識に作るもの」である[赤瀬川 1985=1987 : 25]。具体的には、「不動産に付着していて美しく保存されている無用の長物」[同 : 26]を指すが、重要なのは、そうした、「無用」で作者不在の路上の「物件」に、「超芸術」の観察者である赤瀬川自身が、意味を見出していったことである。しかもそうした意味の見出し方は、決して「理論」的ではなく、赤瀬川自身の「主観」によっている。
- 南伸坊の赤瀬川評：「赤瀬川さんは、人を恐れ入らしたり、はいつくばらせたりするために、知識を仕入れるということのない人で、興味を持つのはいつも「自分の視点」なのだ。徹頭徹尾に内発的である」[南伸坊「赤瀬川さんが考現学に興味をもったワケ」赤瀬川監修 1995 : 146]。
- 赤瀬川の林丈二評：「自分の科学」[住友和子編集室・村松編 2000 : 6・7]。

4-1-2 「観察」から「表現」へ

- 路上観察学会が私にとってさらに興味深いのは、そうした「自分の視点」を「路上」に発見するということの先に、その「自分の視点」を「表現」しようとしているから。
- 路上観察学会の一派「非ユークリッド写真連盟」：人間にとっての「目の前の現実」が、目だけでなく、それに、「さまざまな方向からモノを見ること、過去の記憶と照らし合わせること、耳、舌、皮膚など、他の感覚器官からのいろいろな情報と関連づけられ、初めて」現れるものである[非ユークリッド写真連盟 1999 : 37]から、写真機をそのまま使っても、撮影者の感じた「その場の空気」を「表現」することはできないとし、「その場の雰囲気、現場で感じた空気」を表現するための写真術を次々と開発。 ※「フォトモ」、「ツギラマ」

4-2 野外活動研究会

□「野外活動研究会」（「野外研」）：編集者の岡本信也を中心に、「フィールドワークの同志的集まりとして」[ウェブサイト野外活動研究会「捨てる考現学」]、1974年に誕生。メンバーの多くは、名古屋市近辺に住み、「地域文化・生活環境に関心を持つ」「一般の人びと」-「市民」[岡本 2000a : 81]。会誕生以来、彼らは、各地をフィールドワークし、その記録-報告をし続けている。現在は「町」を主なフィールドにしており、一般的には「現代風俗研究の民間団体」といったイメージの野外研だが、会発足当初は、彼らが「村」と呼ぶ、いわゆる「伝統的社会」への集団での「来訪」とその報告が中心的な活動だった。

4-2-1 「私のえらんだ文化財」

- 「私のえらんだ文化財」：「身近かな日常の生活・風俗をフィールドワークして、自分の眼でえらんだ文化財」で、一方では「私」にとっての大切なものとはなにか」と自問し、

一方では「現代の社会を問い直す」ことが目的 [44号 1990: 346]。〈私〉の問題と、例えば「現代の社会」とか「私たちの生活環境」とか、あるいは「文化」といった言わば〈私たち〉の問題の、〈日常生活〉における関係性を問う場として設定。

4-2-2 「ミュージアムボックス」

- 「ミュージアムボックス」：「町のフィールドワークを通して集めたものや情報を、各研究員がそれぞれに関心のあるキーワードで編集し、現代の社会や生活の1つの断面を、表現しようとするもの」で、「1つの箱の中だけで、1つの世界をイメージできるものを作ろうという試み」[平田哲生「町のオモチャ箱」82号 2001: 729]。フィールドワークの体験を、「もっと「即物的に」、「立体的に」表す手法がないものだろうか」、「即興的展示が発表の型式として実現しないだろうか」という問いから生まれた[82号 2001: 727]。

おわりに そして今日も〈私の日常生活〉は観察され記録されている

- 「VOW」シリーズ
- 『発見ふるさとの宝』（2005年～2006年 NHK 総合テレビ放映）
- 『ワンダーJAPAN』（2005年～、三オボックス）

【引用・参考文献】

- ・ 赤瀬川原平 1985=1987『超芸術トマソン』[ちくま文庫版]筑摩書房
- ・ 赤瀬川原平監修 1995『赤瀬川原平の冒険—脳内レポート開発大作戦—』[同名展覧会カタログ]「赤瀬川原平の冒険」実行委員会
- ・ 石山修武 2000「非ユークリッド写真連盟 1999『フォトモ—路上写真の新展開』書評」『週間読書人』2000年2月11日号
- ・ 伊藤遊 2001「「自分」の〈日常生活〉を「書く」ということ—「郷土研究」再考あるいは自分史方法論研究序説—」『日本学方』第20号、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室
- ・ 伊藤遊 2003a「考現学で民俗学するということ—今和次郎・路上観察学会・野外活動研究会の「〈日常生活〉研究」作法」川村邦光編『語りと実践の文化、そして批評』文化／批評編集委員会
- ・ 伊藤遊 2003「〈日常生活〉研究」の経験—今和次郎の考現学と柳田国男」『柳田国男研究論集』第2号
- ・ 梅棹忠夫 1971「考現学と世相史(上)—現代史研究への人類学的アプローチ—」『季刊人類学』1971年1月号
- ・ 柿本昭人 1993「牧人＝司祭としての今和次郎」『現代思想』1993年7月号、青土社
- ・ 川添登 1975「生活学の提唱—今和次郎の現代的意味」日本生活学会編『生活学 第一冊』ドメス出版
- ・ 川添登・米山俊直・高取正男・高橋徹 1976「座談会「生活学」をめぐって」川添・高取・米山編『生活学ことはじめ—日本文化の原像』講談社
- ・ 菊地暁 2000「柳田国男が希望だったころ—柳田論と民俗学の現在をめぐる極私的考察—」『第7回「柳田国男の会」報告集』
- ・ 現代風俗研究会編 2000『現代風俗 2000 風俗研究の方法』河出書房新社
- ・ 今和次郎 1922「博覧会の建築」『造詣論 今和次郎集 第9巻』ドメス出版、1972
- ・ 今和次郎 1924「装飾芸術の解明」『造詣論 今和次郎集 第9巻』ドメス出版、1972
- ・ 今和次郎 1928「考現学とは何か」『考現学 今和次郎集 第1巻』ドメス出版、1971

- ・ 今和次郎 1931「考現学総論」『考現学 今和次郎集 第1巻』ドメス出版、1971
- ・ 今和次郎 1935「郷土考現学」『郷土史研究』第6輯、雄山閣
- ・ 今和次郎 1951「生活学への構想」『生活学 今和次郎集 第5巻』ドメス出版、1971
- ・ 今輪次郎 1969「「考現学」が破門のもと」『考現学入門』筑摩書房、1987
- ・ 今和次郎・吉田謙吉 1930=1986『モデルノロヂオ(考現学)』[復刻版]学陽書房
- ・ 今和次郎・吉田謙吉 1931=1986『考現学採集(モデルノロヂオ)』[復刻版]学陽書房
- ・ 佐藤健二 1997「コミュニケーションとしての調査」川添登・佐藤健二編著『講座生活学2 生活学の方法』光生館
- ・ 人類文化研究会編 1994『人類文化』第9号「特集 話者の調査観、調査者の話者観」人類文化研究会
- ・ 住友和子編集室・村松寿満子編 2000『林丈二的考現学——屁と富士山』I N A X出版
- ・ 竹内芳太郎 1971「解説——「今民家学」へのアプローチ」『民家論 今和次郎集 第2巻』ドメス出版、1971
- ・ 永井良和 2000『尾行者たちの街角——探偵の社会史①』世織書房
- ・ 野口良平 1997「現代風俗研究会」鹿野政直・鶴見俊輔・中山茂編『民間学事典 事項編』三省堂
- ・ 橋浦泰雄 1956「考現学について」『民俗学問答』新評論社
- ・ 足田正博 1986「今和次郎・吉田謙吉の「モデルノロヂオ」」『現代風俗 '86』現代風俗研究会
- ・ 非ユークリッド写真連盟 1999『フォトモ——路上写真の新展開』工作社
- ・ 藤森照信 1997「考現学」鹿野政直・鶴見俊輔・中山茂編『民間学事典 事項編』三省堂
- ・ 柳田国男 1917「郷土研究の休刊」『郷土研究』第4巻第12号、郷土研究社
- ・ 柳田国男 1941「女性生活史」『定本柳田国男全集』第30巻、筑摩書房、1968
- ・ 柳田国男 1955「序」柳田監修・民俗学研究所編『日本民俗図録』朝日新聞社
- ・ 吉田謙吉 1986『吉田謙吉 Collection I 考現学の誕生』筑摩書房
- ・ 米本昌平 2000「論壇時評」『朝日新聞』2000年3月30日
- ・ Langness, L.L.・Frank, Gelya 1981 Lives : An Anthropological Approach to Biography(=米山俊直・小林多寿子訳 1993『ライフヒストリー入門—伝記への人類学的アプローチ』ミネルヴァ書房)
- ・ Van Maanen, John 1981 Tales from the Field on Writing Ethnography(=森川渉訳 1999『フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法』現代書館)